

# サブウェイ

佐野 広実

第六話 あなたは誰ですか

一

一瞬しか目にしなかった。だが、あの男に間違いない。

明美あけみはそう確信まじまじしていた。

的要一まじまじを殴り殺した犯人の手がかりを得ようと、大崎署なかくぼの中窪なかくぼ由起子ゆきこ刑事とともに、要一まじまじと同郷の知り合いだったと思われる工藤くどう三郎さぶろうを訪れた夜、その工藤を拳銃で撃って逃走した男のことだ。

工藤を撃った男と要一を殴った男は同一人物。

すでに明美の中ではそういう確信が根を張っていた。

撃たれた工藤は危険な状態だった。出血がおびただしく、すぐに病院はんそつに搬送はんそうされていた。

現場に残った明美と中窪は、到着した埼玉県警から事情を聞かれた。

継続捜査のため、工藤に話を聞こうと訪問したとき、事件に遭遇そうごうした。一般人の明美がそれに同行していたことは、中窪の説明で納

得してくれたようだ。

ただ、身元の確認はしつかりされた。明美は地下鉄の私服警備員をしている者だと告げ、身分証も提示した。そして、二年前殺された場要一とは恋人同士だったこと、いままで犯人を個人的に探し続けていたことについても正直に話した。

しかし、それ以上に重大な問題があった。

工藤三郎を撃った男が、どこかで強盗を働く可能性がある。

——やつら、ごうとうを。

工藤ははつきりとそう口にした。やつらが強盗をやるうとしていてる。

明美も中窪も耳にしたのだから、聞き間違いのはずはない。

その話を持ち出すと、聞き取りをしていた年配の刑事は表情をあらためた。

「それは、たしかですか」

声がかきびしくなった。

「間違いありません。中窪さんも聞きましたし」

ちらりと刑事の視線が隣にいた中窪に向いた。

「確実です。近いうちに実行するのではないのでしょうか」

「なるほど」

刑事は考えをまとめるつもりか、開いた手帳の上でペンを何度か

叩いた。

「工藤は、計画に加わるように持ちかけられた。だが、それを断った。で、口封じのために殺しに来た。そういう推測は成り立つか」

つぶやいたつもりだろうが、明美にははっきり聞き取れた。

「それなんですが」

「まだなにか」

明美の声に、刑事は顔を向けた。

「撃って逃げた犯人が、もしかするとの場要一さんを殴って殺した人物と同じなのではないかと」

隣の中窪が驚いたのがわかった。

「それ、たしかですか」

「わたし、何度も防犯カメラを見えています。あの後ろ姿は、同じでした」

中窪の問いに、きっぱり答えた。だが、刑事は首をかしげた。一

瞬目にしただけの証言は、信憑性しんぴょうせいがあまりないと言いたげだった。

「ほかに工藤はなにか言っていますませんでしたか」

「それだけです。そのまま意識を失ってしまっただけ」

そこまで聞いた刑事は近くにいた若手の刑事を呼んでなにごとかをささやいた。若手はすぐさまパトカーの方に向かっていった。

そのころにはすでに規制線が張られ、その向こうに野次馬が群が

つていた。寒そうにしながらも、なにが起きたのかと興味津々きょうみしんしんな顔が赤色灯に照らされて浮かんでいる。

若手が無線で連絡をしているのを見やりながら、刑事は明美たちに告げた。

「強盗をやるうとしているとなると、被害者の工藤の扱いが問題になります。マスコミ対策を考えないとなりません。上に判断を仰ぐことになります」

「どういうことですか」

「工藤が一命をとりとめて意識が戻ったら、犯人は強盗を実行しないでしよう。それどころか、工藤の口から誰が計画しているのか知られてしまいます。いまごろ逃げ出しているかもしれません」

言われてみれば、その通りだった。つまり、もし死亡したとしても、警察が犯行計画の情報を入手したと思われるしまう可能性があるということか。

「あとはこちらに任せていただきます。ひとまずお引き取りいただき結構です。またなにかありましたら所轄しよかつまで来ていただくことになるかと思えます」

刑事はそう言って手帳を閉じた。

「どちらの病院に運ばれたんでしょうか」

中窪が事務的な口調で尋ねると、刑事は川口駅かわぐち近くの総合病院の

名を口にした。

「しかし、継続捜査の方は少し待つてほしい。あなたたちの話によれば、被害者はどこかで強盗が発生すると口にした。そちらを未然に防ぐのが第一だ。それと三年前の振り込め詐欺の仲間についての情報を出してもらいたい」

同じ警察ということもあるのか、刑事の口調は明美と中窪に対するのでは違っていた。

結局、一時間ほど足止めをくらって、解放されたときには午後九時近くになってしまっていた。

現場を離れ、駅へ向かって歩き出すと、すぐに中窪は訊いてきた。

「逃げた男のこと、本当ですか」

本当に要一を殴った犯人なのかと尋ねているのだ。

「証拠はあるのかと言われたら、そんなものはありません。ただ、この一年地下鉄で警備をしていたから、人を見分ける力はあると思っっています」

なるほどといった色が中窪の顔に浮かんだ。

しかし、強盗事件の件がうやむやになれば、要一を殺した犯人を取り逃がしてしまうことになる。

工藤が意識を取り戻し、犯行計画を口にする恐れがあるにもかかわらず、犯人たちが強盗を実行に移すとは考えにくかった。銃を撃

った犯人は、工藤の生死をたしかめる余裕もなく逃げ出ししている。  
このまま逃げられてしまうのはどうしても納得できなかった。

「埼玉県警は工藤から話を聞けるのでしょうか」

不安とともに明美が尋ねると、中窪は視線を外した。

「それはわかりません。いっどこを狙うのかを聞き出せれば、警戒態勢を強めることはできます。でも、それが把握できないとなると、対処のしようがないと思います」

たしかにそうだろう。埼玉県で起きるとは限らないし、どこを警戒しているのか、まるでお手上げだ。それに、工藤の口から日時と場所が把握されたと思われれば、変更して実行に移す可能性もあった。

事件が起きるか、起きないか。

確かなことは、それによって要一を殺した犯人にたどり着けるかどうか左右されるということだった。

## 二

寝つけないまま翌朝起きると、三木<sup>みき</sup>から電話が入った。

非番だったが、話があるので来るようにと言われた。話の内容は告げずに、それだけ言って電話は切れた。

だが、予想はついた。

埼玉県警から身元の確認があったに違いない。となると、要一の犯人探しに同行したという事実も聞いたはずだ。

一歩どころか大きく前進したことを、明美も報告したかった。

あわてて身なりを整え、渋谷の支所に向かう。

だが、三木は苦々しい顔で明美を出迎えた。

「恋人が殺されたという事情は承知しているが、なぜ聞き込みに同行したんだ」

応接室に通されて向き合って座ると、厳しい口調で尋ねられた。

「ご迷惑になるのは承知でしたが、担当のかたが上司に許可をもらってくれたもので」

「そういうことじゃない。なぜ犯人探しを自分の手で行うのかと訊いている」

自分の気持ちにふんぎりをつけるため。

そう口にしたけれど、明美は返事をしないままうつむいた。思っていたよりも、怒りを買っているらしいことがわかったせいでもある。

「もし、犯人探しのためにこの仕事に就いたというなら、そもそも警備員をする資格はない」

いらついた口調で言い放った。それから言い過ぎたと思ったのか、

ため息をひとつついて、つづけた。

「いまさらだが、きみのお父さんとは友人だった。むろん、そういうことで部下として特別扱いをしているつもりはない。しかし、今回はかえってお父さんと友人だったからこそ、注意しておくべきだと思う。わかるだろう」

そこで言葉を切り、「きりりつけるような目を明美に向けてきた三木が、はっとした気配を見せた。

「そうか、聞いていないのか」

苦々しげにつぶやき、三木は口を引き締めてうつむいた。だがすぐに顔を上げてきた。

「とにかく、自分で犯人を探そうなどと考えるのはやめることだ」

それ以上、三木はひとことも言わず、顔をそむけてしまった。

あやまらなければならぬ理由がわからなかった。たしかに早退はしたが、誰にも迷惑はかけていない。

「失礼します」

謝罪しないまま、明美は立ち上がって応接室を出た。

自分の行動のなげきりんに三木の逆鱗げきりんに触れたのかわからなかったし、怒られる筋合いはないと思えた。

それまで自分のことを理解してくれていると信じていたのに、それが一気に崩れ去った。いや、かえって反感すら抱いた。



たしかに最初は要一を殴って逃走した男を探し出すのに地下鉄の私服警備員は適していると思った。しかし、それは最初のころだけだ。じっさいに仕事をし、奥野たち同僚と接するうち、要一のことと仕事は切り離すようになっていった。もちろん、頭の片隅から要一が離れたことはない。それに今回の件は仕事とは別の話だ。

反感を抱いているのは、そのせいだった。

とはいえ、明日から仕事に出ないわけにはいかない。資格がないとまで言われたとしても、それは三木の個人的な考えに過ぎない。

仕事と個人的なことを混同しているのは、三木ではないか。

信頼を取り戻すために擦り寄っていくつもりはなかった。そういった態度を明美は好まないし、三木もそうだろう。

仕事を通して信頼を取り戻し、自分の考えが間違っていないことを示してみせる。亡くなった者の無念を晴らすことの、どこがいけないというのか。

いらだちを抑えつつ渋谷の街に出たところで、中窪に電話をした。事件を解決することこそが、唯一の道だと思ったからだ。

「いまご連絡しようと思っていたところですよ」

名乗る前に、中窪の興奮した声が届いた。

工藤三郎が意識を取り戻したという。出血は多かったが、急所は外れていたらしい。ただちに埼玉県警が事情聴取し、犯行計画がじ

っさいにあることを確認した。

「そちらのほうは県警にお任せするしかありませんが、大崎署長が交渉してくれて三年前の一件について三十分だけ話を聞く許可をいただきました。昨日のような危険なことはないと思います。行かれますか」

明美は当然同行すると答え、昨夜と同じ渋谷のハチ公前改札で待ち合わせることにした。

三木に叱責しっせきされたことはいったん頭の片隅に追いやり、明美は駅前に向かった。

### 三

工藤三郎の搬送された川口市の総合病院は、川口駅から五分ほどのところにあった。

中窪が受付で名乗ると、しばらく待たされ、制服警官がやってきた。

「所轄の刑事課長がいらっしやいます。それまでお待ちください」  
当然といった口振りだったが、やはり縄張り意識があるのだろうか。ここは従わざるを得なかった。

二十分ほど待つと、オーバーコートを着込んだ五十前後の男が受

付ロビーに現れた。それが川口署の刑事課長だった。縄張り意識どころか協力的な態度で、明美と中窪を病室に案内してくれた。ただ、強盗計画の聴取内容については一切口にしなかった。

病室は個室で、部屋の前にはさきほどの警官ともうひとりが警備をしていた。刑事課長を目にしたふたりは直立して敬礼をし、刑事課長は軽く応じた。

「医師からは長い間の聴取は禁止されていますので、お願いします」  
そう釘を刺してから、部屋のドアを開いた。

個室といってもさほど広くはなく、入ってすぐのところは横向きにベッドが置かれていた。腹部のあたりにアーチ状の防護らしきものがあるだけで、工藤三郎は酸素マスクもしていなかった。多少血の気が引いているが、年齢の割に幼い印象のある顔だった。

課長が工藤の前に立つと、怯えたおびような視線を上げ、それから明美と中窪に顔を向けた。

「別件で話を聞きたいという警視庁、大崎署のかたが来ている」  
それだけ言って、課長は後方に下がった。

中窪が身分証を提示して名乗り、明美を紹介した。

一瞬、工藤の顔に驚きの色が浮かんた。明美の顔を知っていたわけではなさそうだが、要一から話は聞かされていたのかもしれない。

「わたしは的場要一さんが亡くなった件を継続捜査しています。そ

の関連で、工藤さんにいくつかお聴きしたいことがあります」

枕元にある椅子にふたりで腰を下ろすと、工藤は弱々しくうなずいた。

中窪は持ってきたファイルを手を質問を始めた。

最初は人定尋問じんていじんに類する事項だったが、やがて核心に進んでいった。

的場要一とは同じ高校の出身だが、東京でも付き合いはあったのか。

「ありました。おれはグズってずっと言われてて、あんまり友達もいなくて。でも、要ちゃんだけは高校のとき仲良くしてくれたんです」

つつかえつつかえだったが、工藤ははっきりした声で答えた。

「要ちゃん」という呼び方が、同級生というより要一を信じて頼りきっていた様子をうかがわせた。

そう、人望はある方だった。

そんなことを明美は思いつつ、やりとりを聞いていった。

要一が東京の大学に進学したあと、工藤はしばらくは地元で飲食店の店員などを転々としていた。だが、なかなかうまく行かず、唯一の「友達」だった要一のいる東京に自分も行こうと決心する。

要一に職の世話をしてもらったりもしたという。それでもやはり

長続きせず、転々と仕事を変わり、その都度要一に心配をかけていたらしい。

そういうことを明美は聞かされていなかった。明美が変に気を回すかもしれないと思っていたのだろう。

ときどき工藤は要一と会っていたらしいが、相談や頼みごとをするのは工藤ばかりで、高校時代はともかく、社会人になっても同様なことをしている自分に心苦しい思いを抱いていたようだ。

そこで自分一人でやっつけていこうと決め、工藤なりに仕事を探していたという。

そんなとき、「簡単なバイト」という携帯のダイレクトメールに引っかかり、振り込め詐欺の受け子になってしまった。

仕事は簡単だった。受け取った金をいったんロッカーに入れ、その鍵を上の方に渡す。報酬はそのあとでもらっていたという。同じ場所ではまずいから、あちこちのロッカーに入れていたと工藤は答えた。茅場町駅のロッカーもそのひとつだった。

つまり要一の持っていたロッカーの鍵は、要一本人が使ったのではなく、工藤が使ったということだ。

最初のうち要一には黙っていたが、報酬は安いし、悪いことをしているという罪悪感もあり、このままではいけないと思い、結局また相談することになってしまった。

それが事件の起きる直前だった。一千万を都内に住む老婆から受け取り、いつものようにロッカーに入れるよう指示された。

相談した時点で金を受け取ってしまっていたらしいが、要一は金をロッカーには入れるなど命じた。金は工藤本人から老婆に返せと言われたそうだ。さらに、ロッカーを空のまま鍵をかけ、その鍵を要一に預けるように告げたという。

「要ちゃんは、おれの代わりに鍵を持って受け渡し場所へ行っただ。リーダーに会って、おれが足を洗いたいって言ってるから、辞めさせてくれって代わりに頼んでやるって」

顔をそむけ、泣き声になった工藤の声は震えていた。

「なぜ、わざわざロッカーに鍵をかけたんですか」

冷静な中窪の問いに、工藤は涙を拭ぬぐった。

「時間稼ぎするって言ってました。金を返したあと、おれが逃げ出す時間を稼ぐんだって。同じとこにいたら、やつらになにされるかわからないから逃げろって言われて。それである日、おれは鍵を要ちゃんに渡して、そのまま」

住んでいたアパートから逃げ出したという。

「要ちゃんがあんなことになったのを、あとで知って。おれが悪かったんです」

仲間に居場所を突き止められ、返さずにもたもたしていた一千万

を取られ、リンチを受けた。そのとき、リーダーが要一を殴りつけ、あとで死んだことを教えられたようだ。

「おまえのせいだからなって言われて。おれが要ちゃんに相談なんかしたから、殺人犯になっちまった。おまえも共犯だって」

結局脅おどされて受け子が続けているうちに逮捕されてしまったが、リーダーはまんまと逃げおおせた。ただ、工藤が殺人の件を口にしてしまうかもしれないと犯人は恐れていたに違いない。そういう場合のためにも、工藤も共犯だと脅しつけていたのだろう。

「そのリーダーの名前を教えてください」

その問いだけに、工藤は首を振った。

「知らないんです。みんなフランケンって名前で呼んでました」

「フランケンシュタインの怪物のことですか」

「そう」

たしかに、そういう綽名あだながつけられておかしくない体格だが、顔までそうなのだろうか。

そんなことを思っていると、中窪がちらりと明美に視線を走らせた。

「そのフランケン、昨日あなたを撃った男と同じ人物ですか」

悔しそうに、工藤はうなずいた。やはり同一人物だったようだ。

「なぜ、フランケンはあなたを殺そうとしたのですか」

「おれ、ムシヨを出てから、逃げたんだ。ぼやぼやしてたら、また捕まって受け子やらされるんじゃないかって。要ちゃんのためにも、さちんとしないといけないって。でも、こないだ働いてる店に来た客が、仲間のひとりだったんだ」

それで居場所がバレってしまった。

「また仕事するから手伝えって。今度は手っ取り早く強盗するって言われて。もう一度逃げたらぶっ殺すって」

しかし、二度と犯罪に手を染めたくはなかった。要一を巻き込んで死なせてしまったことに罪悪感があったのは当然だろう。表向き従うふりをして逃げ出そうとしていたが、それがリーダーに知られた。

そこで計画を知っている工藤を始末するために乗り込んできたリーダーが銃を放った。

もし明美たちがあのと時行かなければ、とどめを刺されていたかもしれない。

「どういう計画だったの」

少し離れて立っている刑事課長の方を気にしながら、中津が尋ねた。課長は聞こえないふりをしている。

「強盗するって聞いただけで、いっどこでやるのかまでは」

工藤が言葉を切って、首を振った。



本当のことを言っているようだ。つまり、埼玉県警もそれ以上の情報を取れなかったのだ。だから刑事課長も中窪の質問を聞き流したのだろう。

「で、そのリーダーのフランケンは、本当にリーダーなの」

「え」

今度の問いは意外だったらしく、工藤は一瞬意味がわからないといった表情になった。

「計画をほとんど知らないあなたを、リーダーがわざわざやってきて始末しようとするかしらね」

ネットなどでメンバーを募っている犯罪グループの場合、本当のまとめ役は姿を現さず、集めたメンバーに仕事を指示して実行させるだけのことが多い。わざわざみずからの手を汚しはしないだろうと中窪は考えているのだ。

たしかにそうだろうと、明美も思う。さらに、工藤は末端の使い捨て要員のはずだ。だったら見つけ出して殺す必要などない。

「フランケンがリーダーだって言われてたけど、もっと上がいるのかもしれない。それはわからないです。おれを始末しに来たのは、たぶん、三年前のことをバラされたくないってことだと思います」

戸惑いつつも、答えた。

「わかりました。ありがとうございました」

そう言うってから、中窪が顔を明美に向けた。なにかほかに聞いた  
いことはあるかというつもりらしく、首をかすかにかしげて見せた。  
明美はどうしようかと迷ったが、いま聞かなければのちのち後悔  
すると思い、息を大きくついてから尋ねた。

「的場さんが殴られて殺されるまでのことは、聞いていませんか」

工藤の目が明美に向けられた。

「あの時の鍵の受け渡しは麻布十番駅あざぶじゅうばんでした。フランケン是要ち  
やんに、おれが辞めたいって言ってる、金はロッカーにある。それ  
で最後にしてくれて言われたそうです。フランケンはそんなの罠  
に決まってるって言ってました。取りに行ったらサツが待ち構えて  
るって思ったらしくて。で、かっとなって要ちゃんを殴りつけたっ  
つ」

だが、要一は怯ひるまず、何度も頼んできたそうだ。フランケンは殴  
り続けても取り繕とすがってくる要一を、気味悪く思ったらしい。倒れ込  
んだのを機にその場から立ち去ったようだ。

ふいに思い出したことがあるのか、工藤の顔が明美をまっすぐに  
見てきた。

「あの、もうひとつあやまらないと。要ちゃんが明美さんと人と付  
き合ってるのは聞いてたんですけど」

「なんでしょうか」

「指輪のこと」

消え入りそうな声で答えた。

遺品の中に、そんなものはなかった。

「あの日、渡すんだって小さな箱を見せてくれて。将来一緒に生きていく相手を見つけたって。だからおれにもすっかり仕事に就いて世話をやかせるなって」

しかし、工藤をランチにかけようとやってきたフランケンがそれを持っていたという。揉み合っているうちに落とし、奪われたのだから。

「それ、どうになりましたか」

急き込んで尋ねた明美に、工藤は首を振った。

「わからないけど、たぶん質屋に持っていったんだと思います。ごめんなさい」

クリスマスプレゼントが遺品の中になかったのは、そういうことだったのか。

そう思うと同時に、悔しさがこみ上げた。いや、そんな生易しい話ではなかった。要一の命を奪ったばかりか、明美の将来も奪われたのだ。

奥歯を噛みしめ、明美は叫び出したいのを必死でこらえていた。

#### 四

それから十日ほどは何事もなく過ぎた。

このままフランケンはどこかに姿をくらましてしまうのかと思うと、仕事にも力が入らなかった。勤務中に背の高いがっしりした姿を目にすると、ひとりでに目が追ってしまう。

工藤への聞き取りで、要一を殴り殺した犯人は、ほぼ特定された。にもかかわらず、名前すらわからないままなのがもどかしかった。中窪は前科者リストから該当しそうな者を探し、工藤に改めて見ってもらうことを約束させたが、それもはかばかしくないようだった。まだ都内にいるなら、なんとかして自分で見つけ出せないか。

その思いが、勤務中も強かった。

おのずと「エルニーニョ」へも顔を出さず、非番のときも地下鉄ばかりか街を歩き回っていた。

三木には犯人探しをするなど言われたが、このままでは引き下がれなかった。むしろ、点呼のときてんこに三木とは嫌でも顔を合わせたか、表向き神妙な態度を装っていた。

東京にフランケンに似た背格好の者が何人いるのかわからないが、探し回って見つけ出せるとは思えない。

それは明美自身がよくわかっていた。ただ、それでも探し回らずにいられなかったのだ。パトカーのサイレンを耳にすると、もしかすると、と思ってサイレンの聞こえる方向に足が向く。似たような姿を目にすれば、疑念とともにその姿を睨みつけた。

早く強盗事件を起こしてくれ。

そんなとんでもない思いにもなった。

事件を起こしてくれれば、警察が動く。そうすれば犯人は追い詰められる。

そういう理屈だったが、その思いが浮かんだのと同時に、このことかと理解した。

もし、犯人探しのためにこの仕事に就いたというなら、そもそも警備員をする資格はない。

三木のその言葉が、正しいのだと実感した。

本業がおろそかになるだけならまだしも、街で見かける者を疑心暗鬼の目で見られなくなる。それは仕事にも差支えがあるし、それ以上に明美の精神を悪い方向に引き寄せた。

街に出て探し回るのは、もうやめようと決めた。無駄足なのは目に見えているし、いまのままでは自分が駄目になってしまう。

そう決心した日、徒勞とともに帰宅すると、すぐに携帯が鳴った。

母からだった。

「今年の年末年始はどうなの」

呑気な声が届いた。

「まだわからない」

「去年は仕事だって言って帰ってこなかったんだから、今年くらいは休みもらいなさいよ」

「考えとく」

「三木さんに頼めばなんとかしてくれるでしょ」

「まあね」

受け答えると同時に、ふと考えがよぎった。

なぜ三木があれだけ怒ったのか、その理由はわかったような気がしたが、あのとき「そうか、聞いていないのか」とつぶやいたのを思い出したのだ。

「ねえ、なぜ父さんと三木さんはしばらく関係を絶っていたの」

「なによ、急に」

ことの顛末てんまつを明美はざっと説明した。

「わたしが無謀むぼうなことをしているって怒られたのよ。そのとき、聞いていないのかって、つぶやいたの。父さんのことじゃないかと思うんだけど」

しばらく電話の向こうで考えるような間まがあった。

「一度だけ、聞いたことがある。結婚する前にね」

どうしようか迷う調子だった。

「なにを聞いたのよ」

押し黙ってしまった。

「ねえ」

大きく息をついた気配が伝わった。

「言うつもりはなかったけれど、いい機会かもしれない。三木さんと父さんは大学時代に、人を死なせてしまった」

耳を疑った。記憶の中の父に、あまりにふさわしくない話だったが、聞いたただ以上聞かなくてはならないと、明美は心に決めた。

父から一度だけ聞いた話だからあいまいなところもあるがと前置きして、母は言葉を選びながら話し始めた。

「ふたりは大学のとき山岳部だったそうよ」

初めて知った。三木も父もがっしりした体格なのは、山登りで鍛えたせいだったようだ。

毎日のように五十キロのリュックを背負ってトレーニングを欠かさず、月に一度は日本中の山に登っていたそうだ。ほかの部員たちと一緒に登山することもあったし、ふたりだけで行くこともあったらしい。

三年生の秋、谷川岳たがわだけに行ったときも、ふたりで行こうということになった。それまで部員たちと何度も登ったことがあり、さほど不安はなかったと父は言っていたという。

「土合どあいっていう駅があるの」

群馬と新潟の県境にある駅で、谷川岳に向かうときに利用する上越線の駅だそうだ。

「もぐら駅と言われていて、上り線は地上にあるんだけど、下り線が駅舎からかなり離れた地下トンネルの中にあってね。地上に出るまでに五百段近くも階段を上がらないとならないんだって。行ったことはないけど、お父さんはそのころから鉄道が好きだったから、作りの珍しい土合駅に行くたび、あちこち見て回っていたそうよ」

苦笑を漏もらしたが、すぐ本題に戻った。

「前の晩に土合駅で仮眠をとって、早朝に出発するらしいわ。その日は一ノ倉沢いちのくらさわが目的地だったみたい。岩登りね」

標高はさほどないにもかかわらず、一ノ倉沢の岩登りは死者が多いので有名だという。ギネスブックに載っているくらいだそうだ。台風が本州に接近していたが、快晴で天気は崩れはまだないだろうと踏んで、ふたりは谷川岳に向かった。

ところが、降雨帯が伸び、登山を開始してすぐに気温が下がり雨もぱらつきだした。ほかのパーティも引き返し始め、岩登りを始め



る直前になって三木たちも断念しかかった。

そのとき、下山してきた者が数人いて、上に途中で動けなくなっている登山者がいるから、いまから救助隊に知らせに行くのだと言っているのを耳にした。

「お父さんと三木さんは、そのとき言葉は交わさなかった。ただ、互いに相手の目を見て、うなずいたそうよ」

それは自分たちが助けに行こうという合意のうなずきだった。

まだ登山の前で体力は十分ある。リュックをこの場に下ろしていけば、すぐに救助して戻ってこられる。

「父さんは、傲慢ごうまんだったって言ってた」

母はため息をついた。

「近くにいた登山者に引き留められたらしいけれど、自分たちは救助の訓練も受けていると言って、そのまま山に向かったのよ」  
救助になりそうな備品だけを持ち登っていくと、中腹あたりには赤いヤッケが見えた。そこまではあっさりとしたどり着いたそう  
だ。

四十代の女性で、滑落かつらくしたらしく、右足を骨折していた。意識もなく、低体温症にもなりかけていた。そこで、持ってきたロープで遭難者と自分たちをつなぎ、両側から抱えつつ下山を開始した。

だが、三木たちも雨と気温の低下で急激に体力を奪われていた。

「このままでは自分たちも遭難してしまう。そのときになって、無謀なことをしてしまったと思っちゃった」

だが、その思いがかえって失敗を挽回ばんかいしないとならないという焦りにつながった。

しばらくは順調に下山していたが、突風が吹きつけたとき、抱えていた遭難者が足を踏み外した。しっかりロープで括くり付けていたはずなのに、遭難者だけが岩場を転落していった。

なにが起きたのか、しばし呆然ぼうぜんとしてふたりで顔を見合わせていた。取り返しをつかないことをしてしまった。善意から出たこととはいえ、人をひとり死なせてしまった。

どうしていいかわからないまま、ふたりはその場にへたり込んでいたという。そこへ救助隊がやってきて助けられた。

警察でも事情を聞かれたが、救助しようとしていたことに間違いはないからと不問に付された。

「東京駅で無言のまま別れて、そのあと父さんと三木さんは顔を合せなかった。大学でも避けていたようね。もちろん、ふたりとも山岳部は辞めた」

そんなことがあったとは、思いもよらなかった。

圧倒された明美は知らぬ間に低くうめいていた。

「地下鉄でサリンが撒かれたとき再会したって話したでしょ」

「それは聞いたわ」

「初めて三木さんがうちに来たとき、ああこの人かつて思ったけど、口には出さなかった。ときどきふたりで会って話していたみたいだけど、わたしはなにも訊かなかった。ただね」

これだけははっきり伝えようとするのか、一瞬の間を置いた。

「たぶん、ふたりとも互いにあのときのことを片時も忘れたことはなかったのよ。二十歳になるかならないかで、一生背負わなければならぬ重荷を抱え込んだんだもの」

銃の発砲があったとき、もし犯人が明美と中窪に立ち向かって来ていたとしたら、中窪は明美を守るために身を挺して銃撃されたかもしれない。命を落としていた可能性もある。

三木が言いたいのは、そういうことだったようだ。

そこに思い至り、明美は背筋が冷たくなった。いかに正しい意図を持っていたとしても、それが人を死に追いやってしまう可能性はあるのだ。

母は語り終えて、笑って短く付け加えた。

「結婚する前、おれはそういう人間だが、いいかって訊かれたのよ。かえってこの人は信用できるって、思ったわ」

「申し訳ありませんでした」

次の日出勤したとき、明美は点呼を終えたあと、三木に頭を下げた。

不思議そうな顔を向けた三木に、母から話を聞いたと告げると、すっと視線をそらした。それだけで意味が通じた。

「そうか。聞いたか」

「はい、聞きました」

「そうか」

「噛みしめるように繰り返した。  
か

「これからは注意します。ただ、犯人を見つけるといのは、どうしてもこの手でやりたいんです。そうしないと前に進めない気がしているんです」

しばし考え込んでいた三木は、うなずいた。

「気持ちにはわかる。ただ、無茶はいかん。そういうことだ」

明美は大きくうなずいて、事務室を出た。

過去の事情を聞いたために、かえって明美の方が面と向かっているのがつらかった。しかし、あやまったことでつかえていたものが

取れたのもたしかだった。

通路を歩いて銀座線へ向かいかけると、名前を呼ぶ声が背後から追いかけてきた。

振り返ると原口由紀はらぐちゆきが駆け寄ってくるのが見えた。

「最近、どうしたのかと思ってさ。ぜんぜんエルニーニョに來ないし」

たまたま出くわした振りをしているが、待ち構えていたらしい。  
覗き込むように明美のぞを見てくる。

「悩みがあるなら、聞くよ。まあ、そんな柄がらじゃないけどさ」

あとの方は照れ笑いにまぎらせた。

「すみません。いろいろ考えるところがあつて。でも、今夜は行き  
ますから」

立ち話で済むようなものではないから、それだけ答えた。

ついこの前、決心して奥野に相談しようとしたが、タイミングを失っていた。それまでは要一のことには誰にも話さないでいようと考えていたが、今こうして原口が心配してくれたのを知り、原口や奥野、町村の三人には話したいという思いがにわかに起きた。

「今度、ゆっくりお話しします」

そう付け加えた。

「まあ、それならいいけど」

「ご心配かけてすみません」

「ま、気にしないでいいからさ」

はにかみ笑いとともに、原口は半蔵門線はんぞうもんの方に歩いて行ってしまった。

気にかけてくれている者がいるということが、そのときほど嬉しかったことはなかった。工藤の要一に対する思いも、似たようなものだったに違いない。

事情を聞きに行ったときからずっと、要一を事件に巻き込んだのが工藤であるにもかかわらず、どうしても憎めないでいた理由がわかった気がした。工藤にとって自分を気にかけてくれる者が要一だけだったのだ。そんな工藤を責める理由はない。

責めを負うべき者はほかにいる。

原口の後ろ姿が見えなくなるまで見送ると、明美はあらためて歩き出した。

銀座線、日比谷線、東西線が、今日の受け持ちだった。

昼過ぎの銀座線は平日でも乗客は多い。午後から雨という予報で、地上では降り始めたらしく、傘を手に行っている乗客が目立つ。

立ったまま車内をそれとなく見渡しているうち、母から聞いた話  
が思い返されてくる。

三木が明美の行動を諫めたのをきっかけに、いままで口にしなかった話を母が打ち明けてくれた形だが、電話でなく面と向かって話したらあそこまで話してはくれなかっただろう。母もいつかは話すつもりだったのだろうが、なかなか機会がなかったのかもしれない。かつて父と三木は、悪意からではなく、それどころか善意から出た行動で他人を死に至らしめてしまった。

それ自体は明美にとってかなり精神的に辛い話だったが、それでも聞けてよかったと感じていた。

そして、おのずとそれは父の記憶へとつながった。

暗い翳はみじんもなく、いつも温和で誰に対しても丁寧に接していた父からは、一ノ倉沢での件を感じさせるような気配はまるでなかった。明美が幼かったから気づけなかったわけではないだろう。

ただ、話を知ってから、あらためて父の記憶をたどると、自分からなにごとかを主張したり、他人に命令をしたことはなかったように思う。明美になにかをさせたいときにも、さりげなく促すような具合だった。

それは一見すると「奥ゆかしさ」に見えた。

だが、その底には、偉そうな態度を取る資格などないという思いがあったのではないか。

父は、そして三木も、自分のしでかした行為の重さをよくわかつ

ていたのだろう。

いや、大半の者は同じ状況に置かれれば、同じように自分を責めるに違いない。

それでも父と三木は、自責の念で落ち込み、自棄やけになって人生を駄目にするのではなく、自分の責めを自覚しつつ、二度と同じ過ちを繰り返さないように生きようとしたのだ。

それはいまの三木を見ていればわかる。仕事柄、多くの者を監督する立場ではあるが、思い返してみれば、父にもあった「奥ゆかしさ」が感じられる。そして周囲の者が危険にさらされれば、まっさきに危険な場に踏み込んでいくに違いない。人を死なせてしまったという引け目は、自分の身に危険が迫ったとき怯むひるのではなく、前に出ていく覚悟につながっている気がする。もちろん、自分が強いなどと思っているからではなく、自分にはあらゆることから逃げ回る権利がないと感じているからだろう。

ふだん強そうな態度で偉ぶっている者にかぎって、内面的には本当は弱いのだ。父や三木のような者こそ本当の精神的強さを持っているのではないか。

三木に面と向かっては口にできなかったが、考えてみれば人を救おうとして死なせてしまった者と、最初から見て見ぬふりで救おうともしない者では、そもそもどちらが人として尊とうといだろうか。



答えはおのずと明らかかなように思える。

あちらこちらに考えが飛び、まとまらない頭のまま電車に揺られていると、耳に入れた無線用のイヤホンからふいに緊張した男の声  
が流れ出した。

——指令室より連絡。警視庁からの要請で、ただいまより全路線  
を警戒下に置く。繰り返す、警戒下に置く。

緊張が走ると同時に、どういふことか一瞬わからなかった。だが、  
続く連絡で事態が把握できた。

——さきほど、午後一時すぎに銀座四丁目にある宝飾店の事務室  
に三人組の強盗が押し入り、二億円ほどの現金が強奪された。銃の  
発砲で従業員二名が重症。犯人は徒歩で逃走し、非常通報で駆けつ  
けた警官が追尾。三名は銀座駅より地下鉄に逃げ込んだが、分散し  
て逃走したため、姿を見失った。見失ったのが一時二十分前後との  
こと。銀座線、丸ノ内線、日比谷線の担当は特に注意されたし。犯  
人は拳銃所持。他の路線に乗り継いでいることも考えられる。乗客  
の安全を確保するよう、注意を払え。

腕時計に目を落とすと、午後一時半になろうとしていた。

まさにたったいまの出来事だ。

犯人はフランケンたちなのか。

工藤を襲ったあと鳴りを潜めていたから、このまま犯行を思いと

どまる可能性もあったが、ついに実行に移したのだろうか。

逸る気持ちは落ち着かせた。どのみち指令室からの連絡だけでは、まるでわからない。

明美の乗っている列車は赤坂見附駅あかさかみつけに到着しようとしている。銀座線で浅草まで行き、折り返しているところだった。

赤坂見附駅に到着すると、明美は列車を降り、事務室に駆け込んだ。

事件の詳細を知りたかった。

事務室にも当然連絡が入っていて、空気が張りつめていた。関係各所に電話をしている者や運行状況の把握や変更などの相談をしている者の顔つきは心なしかこわばっている。

事務員のひとりに声をかけて詳細を尋ねたが、無線以上のことは知らないようだった。

あきらめてホームへ戻りかかると、また無線が流れた。

——目撃情報。犯人のひとり丸ノ内線新宿方面に逃走した模様。あとのふたりは日比谷線南行北行にそれぞれ乗った模様。緊急配備中の警官が列車に乗車する可能性もあるため、身分を名乗って協力されたし。三人の容貌は……。

両耳に手を当て、聞き逃すまいとする。

——容貌は、猿の覆面ふくめんをしていたためはつきりせず。ただし、三

人とも黒のジャンパーにジーンズ。うちひとりは大柄だったとの情報あり。犯人と思われる者を発見した場合、ただちに報告せよ。

銀座から赤坂見附は約六分。

微妙なところだった。すでに上野を歩き過ぎてしまったかもしれないが、あるいは犯人のひとり、明美がいまいる赤坂見附へ向かってきつつあるかもしれない。

フランケンたちの犯行であろうとなかろうと、犯人の逃走を阻止しなくてはならなかった。

日比谷線に乗り込んだ犯人はほかの警備員が警戒するだろう。いま明美にできるのは、丸ノ内線に乗り込んだ犯人を見つけ出すことだ。むろん、赤坂見附に到着する以前の国会議事堂前か霞が関で下車している可能性もあるが、明美のすべきことは決まっていた。

すると追加連絡が入った。

——犯人たちが乗り込んだ列車の運行番号は、運行時刻からの推測で、それぞれ以下の通り。乗車している警備員がいれば、車内を点検されたし。丸ノ内線運行番号27。日比谷線……。

番号を聞くと、急いで丸ノ内線新宿方面のホームへ走った。

なかのさかうえ

中野坂上行きが来るとアナウンスが流れ、ホームの中ほどで待ち構えていると、車両がいつもと変わりなく真っ赤な車体を現した。

正面に記されている運行番号に目をやる。

27だ。

停止した車両から降りる乗客に視線を走らせる。左右を見やって、それらしき姿が降りてくるかどうか、たしかめた。

だが、該当する者はいない。

発車のメロディが流れ、明美は車両に飛び乗った。

ドアが閉じて走り出すのを待たず、最後尾に歩いて行った。ワンマン運転だから車掌はいないが、こういう場合は車掌と連絡を取って、後ろから順に乗客を確認する手順だった。

急いで折り返して前方へ行かなくてはならない。最後尾をさっと見渡して終わらせようとした途端、明美は目を見張った。

頭ひとつ飛び出した姿が車両のいちばん後ろに立っている。乗客に顔を見られたくないのか、背を向けていた。

何気ない風を装いつつ、その後ろ姿に目を凝らした。まさかと思った。だが、間違いない。防犯ビデオに映っていた後ろ姿、工藤のアパートから走り去っていった後ろ姿。

それらとまったく同じだった。

確信しつつも、信じられない思いだった。要一が導いてくれたというほかない。

黒のジャンパーにジーンズ。右手をジャンパーに突っ込み、左手には小ぶりのポストンバッグを提げていた。

本当に犯人だろうかという疑いがぬぐえなかったが、明美は乗客に気づかれぬよう無線連絡を入れた。

「犯人のひとりらしき人物を発見しました。丸ノ内線運行番号27の最後尾にいます」

わずかに間があつてから、応答があつた。

——名前と所属を。

明美が答えると、今度はすぐに声が返ってきた。

——了解。以後、この無線は全警備員に通じるようにした。付近にいる警備員は丸ノ内線の警備に向かえ。穂村警備員の援護を要請する。新宿駅で警察が車両に乗り込む。それまで穂村警備員は監視を継続。くれぐれも手出しをしないように。

## 六

だが、男は新宿に着く前に新宿三丁目駅で降りてしまった。

続いて降りた明美は、びたりと男の背後について改札を出た。地下通路を新宿駅の方に向かって歩いていく。警備の目をくらすため、ひとつ手前で降りたのだろう。

生暖かい通路を歩きつつ無線連絡を入れる。

——了解。新宿三丁目だな。気をつける。すぐに警察が来る。

すでに外は雨が本降りなのか、人の行き来が多い通路は濡れてしまっていた。だが、前後を見ても、警官の姿はない。警官がひとりもないのでは、明美が尾行していることも伝えられない。

地下通路は途中で西武新宿線方面に分岐している。新宿駅に行くとは限らない。新宿駅に向かったとしても、地下鉄以外にJR線と小田急線、京王線がある。地下通路を抜けられてしまったら、乗客にまぎれてあっさり逃げられてしまう可能性が高かった。

拳銃を持っていると無線では言っていた。手出しをするなども命じられた。そんなことはわかっていた。

しかし、それでもあえてやらねばならないときがある。

明美は無線のイヤホンを外してバッグに入れると、迷うことなく男の真後ろに駆け寄って声を張り上げた。

「待ちなさい、フランケン」

この綽名あだなに反応しないなら、背格好がそっくりな別人に違いなかった。

ずっと男の足が止まり、ゆっくりと後ろに顔を向けてきた。

一見すると、どこにでもいる二十半ばの男だった。フランケンという綽名は背が高いというだけのようだ。どことなく大人しそうな顔つきは、強盗や殺人に手を染める印象ではなかった。地下鉄の乗客として見れば、まったく警戒も注意もする必要のない人物かもしれない。

れない。

一瞬、人違いだったのではないかとまで思った。

だが、その視線には、かすかに冷酷れいこくなものがあった。

やぶにらみなのか、いぶかしそうにしているだけなのか、男の視線は焦点が合っていない。

そのぼんやりした目が明美に向けられた。

「誰だ、おまえ」

馬鹿にするように鼻で笑った。強盗をして逃げているとは思えないふてぶてしきがあった。

「フランケン。それがあなたの綽名よね」

「知るか」

「本当の名前はなんていうの」

答えないまま背を向けて歩き出そうとした。

「工藤三郎から全部聞いたわ」

歩みが止まり、ふたたび身体を向けてきた。

さきほどと違い、目に警戒感めいたものが浮かんでいた。

「誰だよ、おまえ」

「それはこっちの台詞よ。セリフ名前を言いなさいよ」

「うるせえ。誰だって聞いてんだよ」

一歩前に出てきた。

「三年前、殴り殺したのはあんたね」

行き交う者の何人かが明美の声にちらりと視線をやって、通り過ぎる。

「知らねえな」

とぼけた調子に怒りがこみ上げ、明美は両手に力を込めた。

「あんたが目的場要一を殺したのよ」

「知らねえって言ってるだろ」

「指輪を返しなさい」

その言葉で、やっと理解したらしい色が浮かんだ。だが、それはすぐに嘲りに変わった。

「そういうことかよ。あいつから指輪もらえなくて未練たらたらってか」

「ふざけるな」

自分でも思っていないほどの怒声が出た。

だが、男は鼻を鳴らしただけだった。

「工藤から聞いたって言ったな」

「そうよ。あんたが殺そうとした工藤よ」

「三年前に始末しとけばよかったよ。あんなゴミやろう、口止めしても信用ならねえからな」

「だから見つけ出して始末しようとしたのね」



「そういうこと」

かったるそうに答えた。

「残念ね。工藤は助かったわ」

興奮したのか、男は齒を剥きだしにした。

「いいか。おれは金に困ってた工藤を助けてやってただけだろうが。

それを偉そうに辞めさせろとか言いやがってよ。へドが出そうだけ」

男の劍幕けんまくを無視して、明美は冷静に告げた。

「あやまりなさい。要一にだけじゃない。工藤にも、わたしにも」

「なめんなよ。この場でぶち殺してやってもいいんだ」

ジャンパーのポケットに入れていた右手が、明美のわき腹あたりにあてられた。固いものがそこにはあった。

「さつきひと仕事してきてな。拳銃だ。脅しじゃない」

「知ってるわよ」

その返事に、男は意外そうな顔になった。

「おまえ、サツか」

「さあ、どうかしらね」

この場に突然明美が現れたことの不自然さに思い至ったらしく、

男はあわてて左右に目を走らせた。

右手をさらに明美のわき腹に強く押しつけた。

「そういうことなら、おめえは人質だ。逃げられるまで一緒に来て

もらおう」

警官はまだか。

明美は視線を前方にやったが、行き来する客ばかりでその姿は無い。イヤホンはバッグに入れてしまったが、首からかけたマイクは生きている。指令室に状況は伝わっているはずだ。

通行人を巻き込まないためには、この場を動かなくてはならない。  
「わかった。行くわよ」

男は明美を右側に立たせ、拳銃を明美に向けたまま歩き出した。

「変なこと考えるなよ。普通に歩くんだ」

「どこへ行くつもりよ」

「どこでもいい。黙ってる」

「そのバッグ」

わざとらしく視線を向けてみせた。

「お金が入ってるのよね。一億くらい」

男は答えなかった。

「仲間のふたりはどうしたの」

「黙れって言ってるだろう」

凄みをきかせた声で睨んできた。両手がふさがっていないければ、襟首に掴みかかってくるかもしれない。  
えりくび

「いいか、これ以上口をきいたらぶち殺す」

ここで発砲したら、窮地きゆうちに陥おちいるのは男の方だ。

口にはしなかったが、そういう意味合いを込めて見上げると、男はいらついたらしく、舌打ちをし、わき腹をつついた。

「おめえの男を殺してるの忘れるなよ。もうひとり始末するくらい屁でもねえんだ」

忘れるはずもない。

明美はそう思いつつ、あらためて歩き出した。

地下通路は約三百メートル。あと少しで新宿駅に到着してしまう。

そのとき、前方から制服警官がふたり、やってくるのが目に入った。長身の男には目を向けているが、「女連れ」には注意を払っていないようだ。地下鉄の指令室からまだ連絡がっていないのか。

ふたりは右端を歩いている明美たちとは反対の端を歩いてくる。ここから声を張り上げたとしても、その次の瞬間には撃たれているだろう。

いまごろになって、汗が背中を伝い落ちるのを感じた。

この男なら、ためらいなく撃つに違いない。

「あきらめな」

そ知らぬふりをして、男が小声で言った。

明美は行き過ぎる警官を目で追うのをやめた。

地下通路から駅構内に続く地点まで来てしまった。

「どの線に乗るつもりよ」

答えないまま、男はメトロプロムナードへ進んでいく。

こうなれば、行くところまで行くしかない。

そう腹をくくったとき、ふいに視界の中に見覚えのある顔が入ったような気がした。あらためて目を凝らすと、それは町村の顔だった。

こちらに気づいているのかいないのか、わからない。手に茶色の紙袋を抱え、プロムナードを小走りに向かってくる。

声をかけるわけには行かなかった。このまま気づかずに通り過ぎてくれないと、町村まで巻き込むことになる。

だが、そんな思いと裏腹に、町村は明美の方に近づいてきた。つい目の前までやってきたとき、そこでつまずいて紙袋を落とした。

「あら、いけない」

紙袋からこぼれ落ちたのはいくつものミカンだった。それが八方に転がっていく。

明美と男の前にも、三つばかり転がってきて止まった。

男は歩みを止め、冷ややかな目でミカンを見下ろしている。

中腰になって明美たちの前に来た町村は、ミカンを拾い上げて身体を起こした。

「すみませんねえ」

にんまり笑うと同時に、男に体当たりをかけた。

明美と男を分けるように飛び込んできたが、図体が大きい男は倒れることなく踏みとどまった。

男はポケットから拳銃を取り出そうとしている。

「逃げて」

明美は町村に向かって叫んだ。

だが、そのときには、周辺にいた何人かの者が男に飛びかかり、拳銃を奪い取って地面に押し倒していた。

すべては、ほんのわずかな時間で終わった。ちょっとしたいぎこざがあつたくらいにしか、はため傍目には思われなだろう。

「怪れないよね」

町村が両手を何度かはたきながら、呆然としていた明美に笑いかけた。

何が起きたのか、よくわからなかった。

「なによ、まだわかんないの。みんな警備員だつてば」

あらためて明美は男を取り押さえている数人の男女に目をやった。ただの通行人だとばかり思っていたが、それが自分の仲間だったとは。

指令室からの無線で、周辺にいた警備員が集結していたのだ。町村がその中にいて、明美を助けると同時に男を確保する計画を立て

たらしい。

そこまで聞いて、一気に身体から力が抜けた。

「おっと、いまごろになって腰ぬかさないでよね」

膝を折って崩れかかるのを、町村が支えてくれた。

やっと、捕まえた。

いや、捕まえたのは、自分ではない。仲間が捕まえてくれたのだ。

そう思いつつ、ねじ伏せられている男に視線をやった。顔を泥ま

みれにして観念している姿に怒りは感じなかった。それは侮蔑あべつに似た感情だった。

ひとりでに涙があふれてきて、何人もの警官が駆けつけて来るのがかすんで見えた。

## 七

新幹線は新大阪を過ぎた。

冬の晴れ上がった空がまぶしい。

明美は、座席で軽く伸びをした。もうすぐ新神戸に着く。駅には要一の両親が迎えに来てくれるはずだ。

犯人逮捕の日から、二週間が過ぎている。めまぐるしい二週間だった。

逮捕された主犯の名前は、かねきともひろ金木智弘。

振り込め詐欺グループの中核だったが、もっと手っ取り早く稼ごうとして強盗を思いついたらしい。

宝飾店の宝飾ではなく、事務室に置かれている現金を強奪するとうのだから、かなり計画性があつた。

当初、金木は三年前の场的場要一殺害の発覚を恐れ、出所した工藤三郎を見つけ出して仲間に引き入れるつもりだった。自分の監視下に置いておくことで密告を防ごうとしたのだ。だが、見つけ出した工藤三郎は強奪計画に加わることを断り、ふたたび逃げ出そうとしたため、殺害してしまおうとしたようだ。

しかし、明美と中窪が事情を聞きに工藤のアパートに現れたため、口封じができたかどうかはつきりしないまま逃げ出した。埼玉県警もマスコミに工藤の容態を公表ようたいしないように要請していたから、生死がわからない。

そのため、しばらく様子を見てから計画を実行に移したのだ。

自供によれば、そういうことだった。

もともと半グレのひとり振込め詐欺のリーダーだったが、手下を操るのが巧みで、自分の上に本当のリーダーがいると信じ込ませ、その架空のリーダーからの命令だといって手下を動かしていた。

つまり、金木本人が自分の命令をきかない者には制裁を加えたり、

分け前を勝手に決めたりしやすいようにしていたということだ。他人をコントロールし、支配欲が強い人物だったようだ。逮捕は今回が初めてだったが、金木が犯した犯罪を周囲の者になすりつけてみずからは逮捕をまぬがれていた節もあるそうだ。

警察ではそのあたりも徹底的に調べるつもりだと中窪が教えてくれた。

もちろん、的場要一の殺人についても取り調べをすることになる。残りの犯人ふたりのうち、ひとりあきはばらは秋葉原周辺で職質をかけられて逮捕され、もうひとりも恵比寿えびす駅で地下鉄警備員の通報で逮捕された。

犯人逮捕の翌日、明美は三木に詫びた。

あまりにも無謀むぼうだったという自覚があったからだ。無茶はいけな  
いと言われたそばから、無茶をしてしまった。

だが、意外にも三木は「きりつけはしなかった。

「無事でよかった」

ひとこと、そう言ったただけだった。それは人命を第一に重んじている者だからこそその言葉だったろう。

他人の命も自分の命も重んじること。

三木が口にするからこそ、明美にもずしりと響いた。

町村をはじめ、原口や奥野にも、今回の件をきっかけに明美は自



分の身の上を話した。話すことで、重荷を下ろせたようでもあった。奥野も同じように身の上を打ち明け、迷っていたが仕事を続けることにしたと全員の前ではつきり口にした。

「穂村さんのおかげで、やっていく決心がついたわ」

そう言われたが、かえって明美の方こそ奥野の悩みを聞くことでみずからを振り返る機会になっていたのだ。

「ま、あたしもいろいろ悩んでるけど、その話はこんどね」

「もういいよ、男の話は」

原口が冗談めかして言うと、町村があっさりといなした。

もちろん、原口にしても町村にしても、抱え込んでいることはあるに違いない。それを口にするかどうかは問題ではない。聞いてくれる相手がいるかどうかなのだろう。

これからもこの仕事をやっていこうと四人で乾杯したとき、明美は自分がやっと新しい道を見つけたように思えた。

ただ、そのときになにかしら淋さびしさも感じたのだったが……。

アナウンスが、新神戸に到着すると告げた。

明美は物思いから覚めた。

こうして神戸に近づくにつれ、あのと感感じた淋しさの理由が、なんとなくわかった気がする。それは要一の死を自分が受け入れた

せいなのだ。いままでは突然の死が受け入れられていなかった。

だが、それを受け入れたからこそ、淋しさが湧き上がってくる。

墓前で両手を合わせ、淋しいと告げたら、要一はどういう返事をしてくれるだろうか。

だからこそ、新しい道を進め。

きっとそう励ましてくれるに違いない。

新幹線は速度を落とし、新神戸の駅にすべり込んでいく。

〈了〉